日本福祉大学社会福祉学部
『日本福祉大学社会福祉論集』第 148 号　2023 年 3 月

〈研究ノート〉

ソーシャルワーク実践理論における「エンパワメント」概念の批判的検討のために

—— Jan Fook（2016）『ソーシャルワーク——実践へのクリティカル・アプローチ』（第三版）を手がかりにしつつ ——

木　全　和　巳

要　約

グローバル化が進み，格差が拡大し貧困が増大する世界と社会において，新自由主義（ネオリベラリズム）に対抗するソーシャルワーク実践理論の創造が求められている．こうした時代には，改めて「エンパワメント」概念について批判的検討を行う必要性があると考える．この研究ノートでは，クリティカル・アプローチの実践理論を深めてきた Fook（2016）を手がかりにして「エンパワメント」概念検討をすることを目的としている．Fook は，オーストラリアで活躍している中国系女性の実践的な研究者である．Fook は，「エンパワメントにおける脱構築的／再構築的プロセスの 4 段階」として，①脱構築（権力（パワー）と権力関係の構築と操作），②抵抗（権力と力関係の支配的な構造に対する問いかけ），③挑戦（権力と力関係に対する支配的で欠落した構造のラベリング），④再構築（権力と権力関係に対する現存する解釈の変更と，権力と関連する実践に対する新しい見方の創造——そしてラベリング）を提案している．こうした提案を中心に，ソーシャルワーク実践における「パワー」「エンパワメント」概念について批判的に検討する．

キーワード：パワー（権力），エンパワメント，クリティカル・アプローチ，
ソーシャルワーク，Jan Fook

「ソーシャルワーク専門職は，人間の福利（ウェルビーイング）の増進を目指して，社会の変革を進め人間関係における問題解決を図り，人びとのエンパワメントと解放を促していく」／国際ソーシャルワーカー連盟「定義」（2000）

「ソーシャルワークは，社会変革と社会開発，社会的結束，および人々のエンパワメントと解

放を促進する，実践に基づいた専門職であり学問である」／同「グローバル定義」(2014)

Ⅰ　問題関心・目的・方法

国際ソーシャルワーカー連盟の「定義」(2000) でも「グローバル定義」(2014) においても，「エンパワメント (empowerment)」概念は，「解放 (liberation)」概念と並び，共に「促進する (promote)」と書かれているように重要な「実践目的理念概念」となっている．「目的」とは実現をしようとめざす事柄であり，「理念」とはこうあるべきだという根本の考えとすると，「実践目的理念概念」であるから，「エンパワメント志向」や「エンパワメント・ソーシャルワーク」のように敢えて「エンパワメント」概念のみを強調することには違和感がある．けれども，特にニッポンの現実の実践場面においては，カタカナで表記される輸入概念でもあり，「目的」そのものの重要性もあまり意識されることはないと推察している．そのために，「そもそもどのようなことなのか？」「なぜ強調しないといけないのか？」「なぜ重要視されないのか？」「敢えて「エンパワメント」を重視する実践とはどのような実践なのか？」「こうした実践は，どのような方法と過程を意識しているのか？」などなど，たくさんの重要な問いを立てて，整理しながら，実践的な考察を深めていく必要がある．

ここでは直接取り上げないが「解放」概念も重要な概念であり，本来であればこれら二つの概念を関連させた上での綿密な検討が必要であると考えている．Fook のこの著作の索引には，「liberation」概念がない．検討するまでもない自明の概念であるからか．「liberation social work」については，この著者名で「Journal for Black Social Workers」のタイトルでアマゾンでもわかりやすい多数の冊子を見つけ出すことができる．Capous-Desyllas & Morgaine (2019) では，「解放の理論とエンパワメント教育」というタイトルで，フレイレ (Frire) の思想を手がかりに関連づけて理解をしようとしている．このようにエンパワメント概念との関連は必要な検討課題である．「解放のためのエンパワメント」理解であろうか．わたしはソーシャルワークとは何か理解するためには，反抑圧や反差別のソーシャルワークとも関連させつつ，この二つの概念をセットにして把握することが大切だと考えている．詳しい考察については後日を期したいが，以下，考察に必要な範囲で簡単に触れておく．

ここで検討する Fook を含むオーストラリアのクリティカル・ソーシャルワークのすぐれた紹介の書でもある横田恵子編 (2007)『解放のソーシャルワーク』の中で木原活信 (2007) が「不即不離の関係」「一体の概念」(p.47) と指摘している．加えて，曖昧さが指摘されるエンパワメント・ソーシャルワークについて理解する時にも，このように二つの概念を他の差別や抑圧などの概念と関連させて把握することが重要であると考えている．ここでは「リベラル (自由解放)」を志向せず「保守権力」を支持し，忖度し，すり寄る態度を示すソーシャルワーカーは，そもそもソーシャルワーカーを名乗ることを「恥」としなければならないだろうことだけは指摘しておきたい．国政選挙の際に業界団体として特定の保守政治家を推薦したことがあることを思い出し

たい．

2017年2月7日に開催された第9回社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会で厚生労働省がまとめた「ソーシャルワークに対する期待について」というパワーポイントの資料がある[1]．ちなみにこの時の会議のテーマは「ソーシャルワークの機能について」である．この資料の二枚目に国際ソーシャルワーカー連盟の定義が紹介されている．「解放」が出てくるのがこの一カ所のみ．「論点に対する考え方」には，「こうしたことを踏まえると，権利擁護・代弁・エンパワメント，支持・援助，仲介・調整・組織化，組織マネジメント・人材育成，社会開発・社会資源開発，福祉課題の普遍化がソーシャルワークの機能といえるのではないか」（p.3）とある．ここには，「エンパワメント」はあっても「解放」の文字はない．エンパワメントについては，「地域住民のエンパワメント」という文脈で使われているのみである．これも，「住民が自身の強みや力に気付き，発揮することへの支援」と本来の意味をかなり矮小化されて使用されている．ちなみに2018年3月にまとめられた報告書「ソーシャルワーク専門職である社会福祉士に求められる役割等について」[2]も同様で，エンパワメントという言葉は「住民のエンパワメント」という文脈でのみ使用されている．また，「解放」という文字は見当たらない．ニッポンにおけるエンパワメント概念のソーシャルワーク実践における不十分な理解は，「解放」概念をセットにして理解しようとしないところにもその大きな一つの要因があろう．

見事なまでの「国際ソーシャルワーカー連盟」の国際的な定義の権力による骨抜き作業である．「とりあえず紹介」であり，「タテマエ理念の欺瞞的確認作業」でもある．こうした小さな忖度の積み重ねが，白井聡（2022）が指摘する「不正」「無能」「腐敗」の三つの「悪徳」として特徴づけられる「2012年体制」の中で起こったわけである．2022年7月の現在，堂々と白昼に政治家に対する「怨恨テロ」が行われる国になってしまった．しかも，自民党を支持する元自衛隊員によってである．彼のツイッターはこうしたことがわかるのを恐れた人たちにより閉鎖された．「旧統一教会」による家庭崩壊の怨嗟から三代にわたる「広告塔」の象徴である元総理に対する「復讐」であった．「家庭」を尊重するカルト宗教と利権で結びついた「2012年体制」を支えてきた「悪徳」も暴露されつつある．30年以上前から子ども福祉の分野では警告が出されつづけていた〈宗教カルト二世〉のソーシャルワークについてもようやく注目されつつある．「旧統一教会」とともに「日本会議」などに影響を受けた「保守勢力」は，夫婦別姓，同性婚など女性や性的マイノリティに人たちの人間の権利の尊重と抑圧からの解き放ちの理念である「リベラル」すなわち「解放」を嫌った．外国人に対するヘイトや搾取も容認したままである．こうした背景からも，「解放」の文字が見当たらない理由が容易に推察できよう．加えて，各地の地方自治体の社会福祉協議会が「旧統一教会」から多数の寄付を得ていたことも指摘しておきたい．

一方で，エンパワメントについては，指摘したように「住民が自身の強みや力に気付き，発揮することへの支援」と本来の意味を矮小化されて使用されている．ここには，エンパワメントというカタカナ輸入用語がそもそも英語圏においても多義性があること（Thomson: 2007, Adams: 2008），そして，ニッポンに輸入されて使われる時には，より権力にとっても，権力に忖度

する人たちにとっても，歪めて使われやすい特徴がある概念であることも，指摘できる．条例制定や住民投票行動まで視野に入れた住民運動，市民活動というソーシャル・アクションの視点はない．「政治的中立性」という言葉を使って忖度を促す保守派の圧力を恐れていては，本来のエンパワメント・ソーシャルワークという実践は成立しないだろう．

伊藤新一郎（2020）は，「ソーシャルワーカーにとっての「社会福祉の理論・歴史・政策」の意義―近年の福祉政策と社会福祉士国家資格制度の動向を踏まえて―」の中で，「無意識的かつ無批判的にそれ（『骨格提言 2016』や「我が事・まるごと地域共生社会実現本部」による「地域共生社会」という概念：引用者）を前提として受け入れ，研究・教育・実践が粛々と行われていくことがあるとすれば，それに違和感と危機感を覚えるのは筆者だけではないはずである．近視眼的に「政策適合的な振る舞い」に終始することなく，批判的視点を保持することはソーシャルワーカーやその養成教育及びその基盤となる学術研究にとってなくてはならない姿勢といえる（下線引用者）」（p.48）と，重要な指摘をしていた．Fook を読むにあたり，本書のサブタイトルにもある「クリティカル（批判的）」という概念にも注意を払いたい．このクリティカルとリフレクションとの関係についても，別途，丁寧に検討する必要がある．

ちなみに，「クリティカル」を「批判的」と一部訳したが，隅広静子（2010）は，「クリティカル・ソーシャルワークにおける「クリティカル」概念の整理の試み」の中で，「クリティカルという言葉は一般的に，「批判的・危機的」等の日本語訳がされている．しかし，クリティカル・シンキングを，例えば「批判的思考」等と訳すのは短絡的であり，（中略），「創造的思考」とでも考えるべきものである」（p.43）と指摘する．隅広は，「クリティカル・シンキング」に引き寄せての解釈である．たとえばブロナー（2018）のフランクフルト学派の社会学の紹介やクロスリー（2008）のイギリス社会学のキーコンセプトの邦訳では，訳者たちは「批判理論」「批判的社会学」と訳している．隅広は，「クリティカル・シンキング」という方法論に依って解釈しているが，「社会学」に依って解釈すれば，「批判的」と訳すことには問題はないはずである．文学では「批評」と訳している．この研究ノートでは，「クリティカル」を原則として，時に「批判的」も文脈に応じて使用する．

もう一点，伊藤は，この論文の中で，「別途検討が必要である」という重要な課題を提起していた．それは，「「社会福祉（学）」と「ソーシャルワーク（学）」の関係をどう整理することが可能かという問い」（p.55）である．伊藤は，岩崎晋也（2011）の序文にある「社会福祉は社会問題に対する政策的対応と実践的対応の両面があるが，その 2 つを統合的に理解するのか，分離して理解するのかについて，社会福祉原論研究あるいは学界において通説を形成できていないという問題設定が今日でも有効だとすれば」（p.ⅳ）を引用しつつ，こう整理をしていた．わたしの立場は，統合的に理解してかつ実践することである．ニッポンのソーシャルワーク実践教育においては，Fook が述べるような批判的アプローチ（社会批判）は十分に機能することなく，権力に迎合的であり，現実社会に適応的であり，「社会変革」を重視する国際ソーシャルワーカー連盟の定義に照らしてみるととても「ソーシャルワーク」と呼べないような実践とそれを支える言

説が主流となっているのが現状と言えよう．

さて，筆者は，現在から20年以上前に，「日本国の社会福祉実践分野における“エンパワメント”概念の」理解と導入と使用に関する批判的検討－「社会福祉基礎構造改革」の基本的枠組みを受け入れた「権利擁護」論との関連において－」という論文を書いたことがあった（木全和巳：2000）．その後，2016年にマクリーンとハンソンの『パワーとエンパワメント』というソーシャルワーカーのためのポケットブックを翻訳した．この間，関連する文献を集め，それなりに読んでいたが，詳しく検討することはなかった．筆者は，物語り（ナラティブ）と対話（ダイアローグ）と学び（ラーニング）いう手法を重視して，貧困（ポバティ）と性と生（ジェンダー／セクシュアリティ）としょうがい（ディスアビリティ）を視野に入れた「ちから」に敏感になり「ちから」をつけあう（エンパワメント・ソーシャルワーク）を志向し，実践してきた．事例検討をする場では，気づきや学びのためのリフレクションやファシリテーションについても注意を払ってきた．けれども，自分の言葉でこうした意識化をして，実践を理論的にも整理することはなかなかできていないままである．常に「リフレクション（ふりかえり）」を怠らず，自分の立ち位置を確認していく作業の重要性については，Fookは本書で何度も指摘している．

今回，こうして改めて，エンパワメント概念をソーシャルワーク実践の視点から再検討してみようと考えたきっかけは，先に述べた現在のニッポンの政治的，経済的，社会的な状況を踏まえたソーシャルワーク実践を支える理論を構築しいていくためには，改めてソーシャルワーク実践におけるパワーとエンパワメントの考え方について整理をしておく必要性を感じたからである．

方法論としては，Fookのソーシャルワークの理論の中のパワーとエンパワメントの議論をとりあげ内在批判的に丁寧に読み拓いていくことにした．Fookを選んだのは，比較的近著であることと，よく売れていて，知られているソーシャルワークの実践的な研究者であり，本書においても，エンパワメントとエンパワメント・ソーシャルワークについても，比較的詳しく触れているからである．検討するに際しては，特に，社会学ではなく，政治学ではなく，ソーシャルワーク実践論の視点から検討したい．Fookのエンパワメント論では，ソーシャルワーカーに「ジレンマを与えている最も切実な問題のひとつが，パワー（権力）」の問題」（p.135）と書いている．こうしたソーシャルワーカーの「揺れ」も含めた実践理論として書かれているので，この視点を大切にしながら，読んでいきたい．単なる紹介ではなく，ニッポンの情勢と自分自身の実践的な立ち位置を潜らせた批判的な研究ノートである．

Ⅱ　Fookの立ち位置とクリティカル・ソーシャルワーク

1．Fookと本書の構成

Fookは，現在，バーモンド大学の社会福祉学部の教授である．以下，大学HP[3]と本書の紹介からまとめた．オーストラリア，ニューサウスウェールズ大学とシドニー大学でソーシャルワーカーとしての訓練を受けた．その後，約35年間，研究者として活躍．2年間をカナダで過

ごした後，英国で仕事，現在は米国に在住．当初はクリティカル・ソーシャルワークの研究で知られていたが，実践研究についても発表している．伝統的な大学のアカデミーの中で，女性の専門職のための正当で特徴的な場所を切り開くことを重視してきた．また，中国系のオーストラリア人女性として，学会や専門職の実践の場において，多様な背景を持つ人々を受け入れる環境作りに情熱を注いできた．最近では，専門的な実践と教育におけるクリティカル・リフレクションの開発に重点を置いている．

Fook の立ち位置は，本書のタイトルにもあるように，「クリティカル（批判的）ソーシャルワーク」である．そして，エンパワメントを検討するに際しても，「ポストモダン」および「ポスト構造主義」の立場から論じている．「ポストモダン」および「ポスト構造主義」について詳細にすることは，この研究ノートの本題ではない．次の「2　Fook の批判理論の理解」以下において，「ポストモダンでクリティカル・ソーシャルワークのアプローチはどのようなものであるか」について，簡単に紹介する．ちなみに，Fook を含む「クリティカル・ソーシャルワーク」の検討としては，田川佳代子（2012）（2013）がある．また，オーストラリアを中心とするクリティカル・ソーシャルワークの紹介については，舟木紳介（2007）の丁寧な紹介がある．

章構成は以下の通りである．「問題の設定」と「理念の再考」と「実践の再考」の三部構成となっている．この中で，パワーとエンパワメントが扱われている．Fook がこれらの概念を重視していることがわかる．

第一部　批判の可能性と現在の挑戦
　1　ソーシャルワークの批判的伝統
　2　実践における現在の文脈　：　挑戦と可能性
第二部　理念の再考
　3　「知」の新しい方法
　4　パワー（権力）（pp.63-76）
　5　言説，言語と語り
　6　アイデンティティと差異
第三部　実践の再考
　7　批判の脱構築と再構築
　8　エンパワメント（pp.135-148）
　9　問題の概念化とアセスメント
　10　ナラティブの段階
　11　文脈の実践　：　実行の段階と文脈
　12　学び続けること

本書は，「純粋な理論書」ではない．ソーシャルワーカー養成のためのテキストにもなってい

る．したがって，各章の末尾には，ていねいな要約と記述式の練習問題もついている．この意味で「実践の学問」にふさわしい記述と内容の本である．

2．Fook の批判理論の理解（1）－ラディカルな構造論への疑問

はじめに，Fook のエンパワメント概念を検討するにあたり，Fook のソーシャルワーク実践理論の立ち位置である「クリティカル・アプローチ」について，「第一部　批判の可能性と現在の挑戦」の記述から，考察に必要なポイントを確認しておきたい．

Fook 自身は，80 年代，90 年代当初は，マルクス主義やフェミニズムに影響を強く受けたラディカルな立場のソーシャルワーク実践理論（構造主義とフェミニズム）に依拠しつつ，解放と社会変革を重点においた実践と教育を行っていた．次第に，こうした理論をポストモダンやポスト構造主義の立場から批判的に検討しつつ，Fook なりの批判的アプローチを構想していく．Fook 自身は，ラディカルな立場のソーシャルワーク実践理論の構成要素については，次の 4 点に要約している．

①社会的，個人的に経験した問題の構造的分析への関与，すなわち，個人的な問題がどのように社会経済構造に帰結しうるか，また「個人」と「政治」の領域が表裏一体であることへの理解
②解放的な分析と行動様式への関与（反抑圧的・反搾取的なスタンスの両方を含む）
③社会批判の立場（ソーシャルワークの専門職と福祉制度が持つ社会的統制機能の認識と批判を含む）
④社会変革への関与　（pp.5-6）

こうした立場で実践を続けていたが，次第に「不安（disquiet）」をもつようになる．当初の仕事は，知的障がいのある本人と家族のカウンセリング，ケースワーク，地域開発だった．ここで「急進派と保守派，あるいはコミュニティ・ソーシャルワーカーとケース・ワーカーに分かれ，保守派は見下されていると感じた」（p.6）ことが「不安」への出発点になっている．80 年代に，大学教育にも携わるようになって，「マクロの批評と個人の体験の間に大きな隔たりを感じる」（同）ようになる．そこで，大学院に入り直して，学び直す．そこでも，急進派（ラディカル）の理論が主流だった．Fook は，「早い段階から，急進的で時に構造的なソーシャルワークの視点を含むほとんどの学術的な理論が，労働者の経験の一部を否定し，切り捨てているというメッセージを受け取っていた」（p.8）と書いている．「Ⅰ問題関心」で少し触れた「「社会福祉（学）」と「ソーシャルワーク（学）」」の関係をどう整理することが可能かという問いとも重なる．

Fook は，大学院で受けたソーシャルワーク実践に関する教育の中で，構造理論について次の 3 点について，特にジェンダーの視点から，疑問をもつ．

1．構造的な視点は，男性と女性の間の地位の差を意味する．男性は社会学者の理論家であり教師であり，女性はソーシャルワーカーの実践者であり学生であった．ソーシャルワークへの急進的なアプローチは，男女の地位差をより平等主義的にするのではなく，むしろ強化するものであるように考えたこと．
2．構造理論はまた，ラディカルな視点によって暗示される「マクロ」な仕事と「ミクロ」な仕事の価値観の相違のジェンダー的性質を暗示した―女性にとって伝統的な仕事の領域である「ミクロ」な仕事は，ラディカルな視点においては相対的に軽んじられていること．
3．構造的思考は，ラディカルな理論や社会学的理論に対して，ソーシャルワークの実践経験を相対的に軽んじることを支持していること．（p.8）

Fook自身は，1993には，タイトルそのものである『ラディカルケースワーク（Radical Casework）』という書籍を出版するが，1995になると，「構造主義を超えて？（Beyond structuralisms?）」というペーパーを発表する．93年の著作の時は，Janではなく，Janisであった．

本書では，このペーパーを引用するかたちで，「ラディカルなケースワークを教え，同じような考えをもつ仲間たちと仕事をする中で」（p.9）生まれた「ラディカルなアプローチによる実践がどのように概念化されるかについての多くの疑問や問い」（同）について綴っている．

たとえば，「多くのラディカルでフェミニストな文献がそうでないと述べているにもかかわらず，私の学生，学者，専門家の同僚の多くは，政治的に正しい仕事はマクロな仕事であり，ミクロなレベルで喜んで実践するのは覚束ない者だけだと，いまだに思い込んでいる」（p.10）こと，「集団的な作業と政治的実践を無批判に同一視することで，一部のラディカルな思想に見られる，もう一つの知的な過度な単純化を示している」（同）ことである．本論との関連では，当時の「エンパワメント技術やエンパワメント・アプローチの流行が少し気になる」として，「どのようにエンパワメントするのかを問うだけでなく，何のために，誰のためにエンパワメントするのか，という難しい問いに取り組む必要があるのではないか」と大切な指摘をしている．また，「ラディカリズムや構造主義の文化により，自身や学生，同僚の中に育まれた一種の道徳的・技術的絶対主義が，柔軟性，寛容位，非判断性，受容性といったソーシャルワークが意図する伝統的価値に反している」（同）との懸念も示している．

このようにFook自身が「不安」に感じたラディカルな構造主義への疑問ついて，以下の6点にまとめている．

1．ワーカーが自らの行動によってのみ「ラディカル」であることができる，あるいはそうであるべきだという仮定，そして新しい実践がラディカルなソーシャルワークの唯一の特徴であるべきだという仮定は，しばしば矮小な無策につながること．
2．「理論」が「実践」にどのように関係するかという，一見単純化されすぎた，一方向の演繹的な見方であること．

3．効果的な「ラディカルな実践家」になるためには，一種の「転向」を経なければならないという考え方は，別の種類のイデオロギー的抑圧のように見えること．
4．関連して，もしクライアントが効果的に助けられるなら，彼らもまた転向をして，新しいラディカルな理論に従わなければならないという暗黙の前提があること．
5．ラディカルな視点は，「パワー」と「アイデンティティ」に関して非常に限定的で単純化された概念を持っているように思われる．この概念は，クライアントとワーカーの両方が活動する多くの状況をカバーするものではなく，実際，不利な立場にある人々をディスパワーされたアイデンティティに閉じ込める可能性があること．
6．ラディカルな理論は，人々や変化や変革の可能性を非常に決定論的に捉えているように思われる．それは，人々に力を与えるというより，むしろ「疎外」するような効果を持っているようで，変化をもたらす力を生み出すというより，人々の個人的な主体性を否定しているように思われること．（p.11）

3．Fook の批判理論の理解（2）－ポストモダンとポスト構造主義の解説

Fook は，ラディカルな構造主義への批判を踏まえ，現在の立ち位置であるポストモダンとポスト構造主義に基づく批判理論について概説した後で，この立場に基づくソーシャルワーク実践理論の可能性について，次の 9 点にまとめている．

1．社会的文脈を重視し，これを個人の経験と常に結びつけること（例えば，状況的主観）で，社会的文脈における個人をより詳細に理論的に理解し，また，社会構造がいかに日常の経験の一部であるかについての理解を大きく進展させる．それは，「人 - 状況」の交点における実践に，より強力な理論的基礎を提供するものである．
2．二分法的思考の分析は，ジェンダーに偏った思考と関連する実践を批判するための優れた基礎を提供する．
3．複数の言説を認識することは，ソーシャルワーカーが置かれている多面的な状況に，複雑な理解を加えることになる．このことは，より効果的な実践を可能にするはずである．
4．「差異」がどのように構築されるかを認識することは，周縁性を概念化し，パワーを与える方法でそれを再定義する代替的な方法を提供する．
5．主観やアイデンティティの変化を許容することは，人間の生活の複雑さや，生きることが文脈によって絶えず媒介されることを表している．これにより，人々の生活に対する我々の理解を，彼ら自身の認識や経験とより密接に一致させることができる．
6．知識がどのように生産され，「階層化」されるかを理解することは，サービス利用者と実践者の「周縁」の声を「脱認識」し，評価するための代替方法を提供するものである．
7．「理論／実践」という二項対立を覆すことは，実践と生きた経験を知る方法として再評価することにつながる．これは，彼らの経験とアイデンティティを認め，正当化することで，

これまで疎外されてきた人々に力を与える可能性もある．また，新しい視点を取り入れた，より複雑な形の理論を開発することも可能になる．

8．知識と理論が複数の方法で生成され使用される可能性があるため，より柔軟な実践が可能になる．

9．主流となる実践を批判（脱構築）することで，既成のヒエラルキーや力の差を覆し，新たな形でのエンパワメントの可能性をもたらす．（pp.14-15）

続けて，Fook は，こうした理論を支持するが，ポストモダニズムに対する疑念についても，指摘をしている．たとえば，イギリスの Garrett（2013）を紹介しつつ，「モダニティの回復力（復権）」について示唆する．この視点は，「ポストモダン的思考が道徳的相対主義を支持し，ソーシャルワークの社会正義，さらには批判的理想を損なう可能性がある」（p.16）という批判である．この極端な相対化は，ソーシャルワーク教育にも，影響を与えるとする．つまり，「ポストモダンの分析は，適切な，あるいは望ましい知識や行動方法についての指針を提供しない」（同）からであると．

Fook は，ラディカルな理論，構造主義的な理論，フェミニスト理論はどのような社会をもつべきか，どのように行動すべきかという理論であるのに対して，ポストモダニズムの理論は，知の方法，つまりは認識の理論であるとまとめている．そして，ソーシャルワーク実践理論においては，「ポストモダンの考え方を構造的な理論とどのように組み合わせることができるかを考える」（同）ことが出発点になると指摘している．こうした枠組みが，クリティカル・アプローチであるとしている．

4．Fook の批判理論の理解（3）－批判理論に基づくソーシャルワーク実践理論の解説

Fook は，Agger（1998）に依拠しつつ，次の 5 つの視点で，クリティカル・ソーシャルワークの理論を要約している．現在は，Oxford から第三版が出ている．

1．「支配」は構造的なものでありながら，個人的に経験するものでもある．それは，支配集団が外部からの搾取に加え，内部の自己規律や自己欺瞞を織り交ぜて達成するものである．これは，人々は自分自身の抑圧にも参加しているという考えである．一部のフェミニストが言うように，人々は「自虐的」な信念や習慣を持ち，それを永続させているのである．

2．したがって，「虚偽意識（false consciousness）」の概念は重要である．資本主義社会では，社会関係が実際には歴史的に構築されたものであり，したがって変革可能であることを社会の構成員が認識できないように，誤った意識のプロセスが作用しているという認識がある．

3．受動性と運命論的態度を助長するため，主要なイデオロギーとして実証主義を批判している．社会的構成員は，自分たちが置かれている状況に対して行動する力から切り離され，

関わりを失い，疎外されていると考えている．したがって，「事実」を変えることのできる歴史の断片としてとらえることができる意識を育てる必要がある．これは，社会を変革する個人的・集団的な代理の力を強調するものである．

4．進歩の可能性は批判的社会理論に内在するものである．支配と社会変革の可能性についての認識を高めることに批判的社会理論の役割を見るという点で，それは政治的である．構造的支配に対するこの認識を日常的な経験と結びつけるので，批判的社会理論は決定論的というよりはむしろ自発的である．

5．実証主義批判の一環として，知識は単に「経験的現実」の反映ではなく，それを研究する人々によって能動的に構築されるものであるとの認識がある．したがって，因果関係の分析から得られる知識と，自己反省や相互作用から得られる知識とを区別する必要がある．つまり，主要な変容（transformation）のプロセスとして，コミュニケーションに信頼を置く必要がある．（p.18）

このように要約した後で，次の三点がクリティカル・ソーシャルワーク理論のポイントであるとしている．なお「虚偽意識（false consciousness）」については，別途，検討が必要であろう．たとえば，ガベル（1980）の検討などが必要であろう．

①対話的でリフレクティブな「知」の方法の認識
②構造的支配と個人の自己の限界との関係の認識
③個人と社会の両方の変革の可能性の認識（p.18）

Fook は，上記の 3 点について，「このアプローチには，社会的現実が外部と内部の両方においてどのように構築されているかについての理解が含まれる」（p.19）「個人と社会の相互作用を批判的に分析し，外部構造と構築された思考法（言説）の双方で作用する利益集団と権力関係を位置づけることで，解放の可能性が開かれる」（同）「抵抗と変化は，このような方法で構築された権力関係や構造に挑戦することにある」（同）「対話と相互作用のプロセスを通じて，自己と他者の関係性を明らかにすることができる」（同）「特定の状況において権力関係が具体的にどのように表現され，使用されているかを理解するためには，経験的に得られた知識とともに，対話と相互作用，自己反省と分析のプロセスを通じて達成されるものである」（同）とまとめている．

そして，ポストモダンで批判的なソーシャルワークの実践とアプローチについては，「支配や搾取，抑圧のない社会を促進するような方法で実践することに主眼が置かれている」（同）として，「構造がどのように支配しているか，また，人々がどのように社会構造や関係性を構築し，また変化することによって構築されるかに焦点を当て，認識するものである」（同）として，「表向きは同じような状況であっても，そこには複数の多様な解釈が存在することを認識する」（同）ことで，「社会関係や構造に関する理解は，支配的な理解や構造を破壊するために，また，異な

る利益集団をより包含するようにこれらを変化させるための基礎として用いることができる」（同）と書いている．

加えて，「こうした理解に必要な知識は，様々な方法で得ることができる」（同）として，「物質的な構造がどのように生活を形成しているかを理解するためには，経験的な知識が必要であり」（同），「自己反省（セルフリフレクション）のプロセスは，支配的な構造と関係が日常生活の中で暗黙のうちに行われていることに挑戦することを保証するために重要であり」（同），「コミュニケーションと対話は，多様な視点が新しい包摂的な社会を築くために必要である」（同）とする．そして，「コミュニケーションと対話は，新しい包括的な方法を構築するために必要であり」（同），「ポストモダンでクリティカルなソシアレワークでは，求められる社会変化の種類と，それが実現される方法の両方が重要である．結果とプロセスは互いに不可分である」（同）とまとめている．

この章の最後では，最近のクリティカル・ソーシャルワーク実践理論の展開として，「反抑圧」「反差別」に広がっていること，Payne（2014）に依拠しつつ，「エンパワメントとアドボカシー，批判的実践，フェミエスト実践，反抑圧と多文化感受性」の4つのグループに分けていることを紹介している（Payne新版2022あり）．格差が拡大し貧困が増大するグローバル化が進む世界と社会において，ネオリベラリズムに対抗する人権重視，階級重視の新しい実践理論の必要性も指摘されていた．

わたくし自身は，体系（システム）と構造（ストラクチャー／コンストラクション）と機能（ファンクション）の概念を区別している．ちなみに“structure”は家族構成など組み立ての意味だが，“construction”は概念や理論の構成を意味している．

Ⅲ　Fookのパワーとエンパワメント論の検討

次に，本書の「第二部　理念の再考　4　パワー（権力）」のところを読み拓いてみたい．

1．「エンパワメント・モデル」に対する批判

Fookは，「エンパワメント・モデル」に対する批判として，次のように考えている．「アプローチ」ではなく「モデル」という概念を使用している．本来，「実践目的理念」概念であるが，実践モデル概念としても使用している．こうした点については，中村和彦（2017）がニッポンのソーシャルワーク教育に引き寄せて，「用語の不統一」の問題について「ソーシャルワークの主要用語となっている「ストレングス」を一例にあげるならば，ストレングス視座（視点・パースペクティブ），ストレングス・モデル，ストレングス・アプローチと種々，様々に使われ，その違いについて充分な説明がなされているとは言い難い実状にある」（p.35）と書いていた．

「ある意味で，エンパワメントの考え方は，比較的理解しやすい概念であり，また，直接的な実践に適用するための準備が整ったフレームワークを約束するものであるため，魅力的である．

しかし，・・・(中略)・・・実際に適用するのはそれほど簡単ではない．ひとつには，エンパワメントという考え方が非常に異なる使われ方をしていることである．人々は，「パワーのある」グループや「パワーのない」グループに簡単に当てはまることはなく，時には両方のグループのメンバーであることもある．また，パワーを奪われた集団のメンバーは，エンパワメントの形態について必ずしも同意していない．まったく同じ経験が，ある者にはパワーを与え，ある者にはパワーを奪うこともある」(p.65) と．

そして，Adams (1996, pp.12-15) のエンパワメントが実践される際に関連するいくつかのリスクについて紹介している．最後の項目 () は，Adams にはあるが Fook は紹介していない．

- 人々が行うことなくエンパワメントを行うことのパラドックス
- ある人のエンパワメントが別の人のディスエンパワメントになる可能性
- 希薄化の危険性 － エンパワメントからイネーブルメントへ
- 多くのターゲットグループに対応しすぎることでどのグループにも適切に対応できない危険性
- セルフヘルプ（自助）とエンパワメントの間の曖昧な関係

(・右派による急進的エンパワメントの共同選択　－　消費主義　対　参加主義)

続けて，「エンパワメントは理論的な枠組みではなく，目的（ゴール）であることを忘れてはならない．批判的アプローチにおいては，ある種の社会正義の視点が働いている必要がある．誰がどのような目的のためにエンパワメントされるべきかについてのガイドラインは存在しないのである．エンパワメントのモデルは，保守的にも過激にも使えるので，誰にどのようにエンパワメントするのかを決定する際には，私たちのより広い目標とビジョンを意識する必要がある」(pp.55-56) と，述べる．そして，「明らかに，エンパワメントの概念は批判的実践にとって重要だが，より広範な構造分析やパワー（権力）に対するより複雑な理解とリンクさせることなく，このような「一過性の」概念を用いることには多くの危険性が伴う」(同) として，「エンンパワメントのモデルを使う場合，「何のためのエンパワメントか」「誰のためのエンパワメントか」というような，より重要な問いを投げかけない限りは，エンパワメントをめぐる問題は解決しない」(同) し，「こうした問いを立てない限り，誰かのために抑圧的な構造を永続させる可能性が残されている」(同) と，この概念に対する重要な論点を指摘している．

2．パワーとエンパワメントの概念における問題点

次に Fook は，パワーとエンパワメントの概念における問題点として，ポストモダン，ポスト構造主義的な観点から次の 5 つの問題を指摘して，解説を加えている．それは，①商品としてのパワー，②二律背反の関係，③差異を許容すること，④矛盾を考慮すること，⑤エンパワメントにおけるディスエンパワメント的経験である．順次，Fook の議論を要約しつつ，コメントを加えておく．

①商品としてのパワー

「近代主義的なパワー（権力）の概念は，パワーを「商品」として，つまり，取引されたり，譲渡されたり，ある人や集団から別の人に移されたりする物質的な実体として概念化している．この問題は，エンパワメントが常にあるグループや人から別の人への犠牲の上に成り立っていることを示す．もし，ある労働者がサービス利用者にパワー（権限）を与えたり，その権限の一部を与えたりすると，定義上，その労働者は権限を失うことになる．この種の概念は，人々やグループを互いに対立する関係に置く可能性を持っている」（pp．66-67）．

資本制社会におけるあらゆるサービスが商品化され，労働力も商品となり，かつ労働そのものが疎外された状況のもとで，ソーシャルワークという実践をソーシャルワーカーという実践者が実践をして起こる現象である．

②二律背反の関係

「パワー（権力）の概念は，世界を2つの対立するグループ――パワフル（権力）者とパワレス（無力）者――に分割し，これらが相互に排他的なグループであるという仮定を伴っている．サービス利用者にとっての問題の一つは，もし自分がパワレス（無力な）集団の一員であると分類され，二つの集団の間の溝が乗り越えられないものであるなら，パワフル（強者）になるためのプロセスは達成不可能に思えるかもしれない．あるグループから別のグループへパワー（権力）が移動すると，しばしば責任や非難が別の方向へ移動することがある．これは，エンパワメントを必要とするグループから責任（ひいては「agency（エィジェンシー）」つまり効果的に行動する能力の感覚）を遠ざけ，皮肉にも支配的なグループの膝元に戻す効果がある．この意味で，自分のアイデンティティを「パワレス（無力）」であると定義することは，自身をディスパワー（無力化）する効果がある．・・・・・・アイデンティティは，多くの場合，外部から，通常はよりパワーがある者から付与されるものであり，したがって，そのようなレッテルを貼られた者は，自ら選択したレッテルではないため，パワーを奪うように機能することがある」（p.67）．

Fookは，直接ここでは触れておらず，参考文献にはあげているが，Bourdieu, PとButler. Jの「agency」概念と重ねて理解することが重要だ．特に，Bourdieuのする支配関係の根底にある暴力を婉曲化することを目的とする権力作用を意味「象徴権力（pouvoir symbolique）」の概念は重要である．加えて，Butler．Jの「performativity」の概念までも視野に入れる必要がある．

バトラー（2004）の『触発する言葉』では，「エィジェンシ（行為体）」という概念を中心においた社会変革の理論を提示した．「エィジェンシ」とは，既存の社会的エィジェンシ用によってパフォーマティブに構築される点で自律的主体とは異なるものの，引用によってその存在のあり方を決定されず，引用の反復を通じて規範をずらし変革する力をもつとされる．この概念によってバトラーは，ポスト構造主義的主体批判を継承しつつも，社会決定論的な閉鎖性に陥らない，ラディカルな文化政治理論を立ち上げることを目ざした．

③差異を許容すること

「近代主義的なパワー（権力）の概念は，私たちが平等（equality）を目指し，エンパワメントとは不平等を減らすことであると仮定している．しかし，平等とは何を意味するのかが不明確であったり，単純化されすぎていたりすることが多い．多くの場合，平等＝同一であると仮定している．したがって，エンパワメントのプロセスは，必然的にすべての人々やグループが同じになることを意味することになる．例えば，女性にとっての平等とは，男性と同じようにフルタイムの仕事やキャリアの機会を追求する能力を意味すると仮定することができる．このような考え方の問題点は，個人の選択や社会的な差異を受け入れる余地がほとんどないことである．誰かと同じであるという経験は，実際，ある人々にとってはパワーを奪うことになるかもしれない．これは，パワーを得るということが，性格や社会的・文化的背景，あるいは現在の状況の違いから，その人に適さない目標を達成することを意味する場合に当てはまる．（中略）．また，主流と同じになろうとする傾向がある場合，同一性を追求することは，他の多くの視点を実際に沈黙させる効果を持つかもしれない．この場合，主流派の視点は，周縁のグループが目指す基準を定義することで，再び支配的になってしまうかもしれない．この意味で，エンパワメントの逆説のひとつは，すべての人が支配的な集団のようになるようにエンパワメントすることが効果的であることかもしれない．これは，望ましいと思われる限界的な集団の特徴を切り捨てる（そして潜在的には消滅させる）だけでなく，望ましいもの，正常なものとして定義されるものに対する支配的な集団の支配力を強めることにしかならないかもしれない．この文化的正統性への傾向は，エンパワメントの潜在的なマイナス面である」（pp. 67-68）．「平等」概念の再検討を迫る指摘である．

ルソーは，1789 年のフランス革命を準備した『社会契約論』（1762）に中で「この基本契約は，自然的平等を破壊するのではなくて，逆に，自然的に人間のあいだにありうる肉体的不平等のようなものの代わりに，道徳上および法律上の平等を置き換えるものだということ，また，人間は体力や精神については不平等でありうるが，約束によって，また権利によってすべて平等になる」と書いている[4]．「能力」（機能しょうがい）を前提に「約束」「権利」という「承認」により「道徳上」「法律上」の「平等」を達成するという考え方である．残念ながら，「フランス人権宣言」（1789）は，「すべての市民は，法律の前に平等であるから，その能力にしたがって，かつ，その徳行と才能以外の差別なしに，等しく，すべての位階，地位および公職に就くことができる」（第 6 条）と「才能による差別」は認めている[5]．現代では，「他の者との平等」（「障害者権利条約」（2006））にあるように「合理的配慮」を提供しないことも差別である．「しょうがい」と「平等」（「公平」「公正」「解放」）との関係を考える上でも大切な視点である．この点については，最近話題になっている図を貼り付けておく[6]（図 1）．「JUSTICE」のところが「LIBARATION」になっていた．「合理的配慮」と「差別」も検討を要する．他にも，「フェミニズム」「ジェンダー」などの言葉ももっともっとていねいに吟味したい．最近，注目されている Collins & Bilge（2020）らによる「交差性（intersectionality）」の概念も検討が必要である．

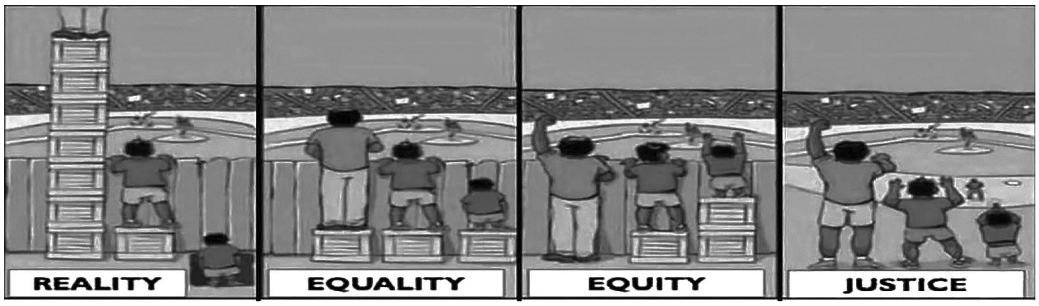

図 1　＝「平等」(「公平」「公正」)

④矛盾を考慮すること

こうしたパワー（権力）の概念化は，不確実性，矛盾，差異を説明する上で不十分である．特に，「抑圧への加担」という現象は，伝統的に不利な立場に置かれてきた人々や集団が，自分たちを不利にするように組織的に働く信念に進んで従っているように見えることがあるため，説明することができない．フェミニストはこれを「自滅的」信念と呼び，マルクス主義者はこれを「虚偽意識」と呼ぶかもしれない．

しかし，いずれにしても，伝統的な近代主義のパワー（権力）概念は，ある人々が，明確で力を与えられたように見える選択に直面したとき，それでも自分の最善の利益に反するように見える経路を選択するかもしれないことを説明するには成功していない．この現象をポスト構造的な方法で理論化するならば，おそらくある人々は，提供された選択肢が彼らにとって意味のある言葉で提示されていないために，明らかに自滅的な道を選ぶのだろうと推測することができるだろう．例えば，フェミニズムの信念の場合，フェミニズムは白人の中流階級の運動として西洋で生まれたため，非英語圏出身の多くの労働者階級の女性はその原因に共感できず，「非フェミニズム的」と思われる道を選ぶことになるとしばしば論じられるが，これは現在概念化されているフェミニズム運動が，彼ら自身の経験から生じたものではないためである．

「抑圧への加担」のもう一つの説明は，選択肢が見かけほど明確でないということかもしれない．たとえば，男性グループの場合，政治家にアプローチすることで利害が一致しているはずなのに，どの方法が自分たちの目標，ひいてはエンパワメントを達成できるのかが明確ではない．政治家がどのように反応するかは予測不可能であるため，この状況では何が自分たちの力を高めることになるのか，明確な選択肢はない．グループのメンバーの中には，政治家を遠ざけ，自分たちの橋を早々に燃やすことを懸念して，あまり闘争的でない，自己主張が弱いと思われるようなルートを選ぶ人もいるかもしれない．また，自分たちの快適さを重視するあまり，グループ全体のエンパワメントに十分配慮せず，「売り渡し」をしていると主張する人もいるかもしれない．議論の是非はともかく，エンパワメントには複雑な問題があり，矛盾や変化，差異が生じる余地があることは明らかである」(pp.68-69) としている．

⑤エンパワメントのディスパワー的経験

「パワーを与えられることは，エンパワメントとして経験されるのではなく，実際にはディスパワー効果をもたらす可能性がある．どんなに良い意図があっても，私たちのエンパワメント理論が必ずしも実践にうまく反映されるとは限らない．エンパワメントをしようとするあまり，ディスパワー的な風土や文化が出来上がってしまうこともある．私たちの多くは，誰かが私たちを「助けよう」とすると，それが恩着せがましく，やる気をなくさせるプロセスであることを経験したことがあるのではないか．ある異文化カウンセラーのトレーニングに参加したとき，そのカウンセラーは，「伝統的な」文化圏の人とのインタビューを始めるのに，名前の意味を聞くのが一番だと主張している．それはまるで，自分が何者であるかということよりも，自分の外見に基づいて，偏見に満ちた関わり方をされているような感覚だった．実際，私は自分自身の条件ではなく，カウンセラーの条件に基づいて関わりを持たされていた．

もちろん，レッテルやカテゴリーで関わることは，人間性を奪い，差別することになりかねない．したがって，常に「ディスパワー」された人を，それが彼らのすべてであり，これからもそうであるかのように定義し，関わることは，彼らのエンパワメントとは逆に働く可能性がある．このように，他者をエンパワメントしたい人にとっての問題は，威圧的な状況や反対の状況を作り出すことなく，いかにして力を発揮するかということである．例えば，サービスを適切に運営するために，サービス利用者のカテゴリー分けをする必要がある場合がある．しかし，そのようなカテゴリーに当てはまる人々にスティグマを与えることなく，どのようにカテゴリー用のラベルを作成し，使用すればよいのだろうか．Minnow（1985）はこの問題を「差異のジレンマ」と呼んでいる．エンパワーするためにディスアドバンテージを定義する行為そのものが，実際にはディスアドバンテージを生み出し，その結果ディスパワーしているのである．

したがって，権力とエンパワメントに関する批判的な概念を再構築する際には，経験や視点の差異や多様性，そして，異なる状況において権力が経験され伝達される方法の柔軟性を許容するような考え方を構築する必要性に迫られることになる」（p.69）とまとめている．

3．Fook によるパワー（概念）の再構築

Fook は，以上のような 5 つの問題点を指摘した上で，パワー概念の再構築に取り組んでいる．この時には，Foucault の「権力」理解を参照にしている．Healy（2000）の Foucault の権力の三つのアプローチ，①パワー（権力）は行使されるものであり，所有されるものではない，②権力は抑圧的であると同時に生産的である，③権力はボトムアップで生まれるの三つを受けとめつつ，次ようにまとめている．

「パワーとは，人々が単に所有するというよりも，むしろ使用し，創造するものである．それは商品ではなく，むしろ社会的相互作用のプロセスと構造を通して生命を与えられた要素である．この意味で，権力は社会的関係から生み出されるものであり，有限なものではない．したがって，力の弱い人と強い人の両方が協力して，すべての人がエンパワメントを経験するような

状況を作り出すことができると考えられる．つまり，コラボレーションによって，より大きなパワーが生まれる可能性がある」(p.70).

「パワーは特定の人，グループ，構造にあるものではないので，どこにでも存在する可能性があることを意味する．重要なのは，どこにあるかということではなく，異なる環境，異なる人々によって，どのように使われるかという．(中略)．権力には，支配と制限，形成と変容の可能性がある．国家権力によって個人が規制されるだけでなく，国家権力は，適切なカテゴライズを提供することによって，個人に生活とアイデンティティを与え，それによって生活を営むための布石とする．国家権力は服従させると同時に，創造的な構造も提供する．こうして，個人は，パワーアップとディスパワーを同時にもたらす実践と構造に進んで参加する．権力は良いものでもあり悪いものでもある」(同).

「権力はミクロとマクロの両方のレベルの関係や構造で表現される．ローカルなレベルでの権力の発現は，包括的なレベルで明らかになるものよりも複雑で矛盾している場合がある．したがって，グローバルな構造だけでなく，特定のコンテクストにおけるパワーのローカルな表現の両方を評価することが重要である．この「ボトムアップ」のパワー観は，パワーが日常の豊かな関係の中でいかに表現されているかを見ることを奨励している」(p.71).

すべての人は，社会的地位や場所に関係なく，何らかの権力を行使し，また行使する可能性を持っている．これは，それぞれの文脈や文脈の変化に応じて変化する．したがって，ある文脈におけるパワーを理解する鍵は，それがどのように表現され，経験され，さまざまなレベルの人々によって作り出されるかを理解することである．

Fook 自身は，Arent（1969）の権力論には触れていない．この文脈においては，「他人と協力して行動する能力に対応するもの」(p.44）であって，「人々があるグループに所属し，そのグループが集団として存続する間にかぎり存在する」(同）という Arent の「権力」概念と通底している．

Ⅳ　Fook のソーシャルワーク実践におけるエンパワメント論の検討

この研究ノートの主要部分となる「第三部　実践の再考　8　エンパワメント」の部分を読みながら，Fook のソーシャルワーク実践におけるエンパワメント論を検討していきたい．

1．パワーとエンパワメントの概念の検討

Fook は，Ⅲで議論したことを踏まえ，ポストモダンとポスト構造主義，そして批判的な社会理論に依拠しつつ，ソーシャルワーク実践の理論の中で，パワーとエンパワメントの概念を新しく位置づける際の重要な観点として，次の 4 点を指摘している．

①パワー（権力）の本質は文脈と変化であること

②パワー（権力）はさまざまなレベルで，しばしば同時に，また矛盾した方法で作用するものであること
③パワー（権力）は異なった人々により経験されるものであること
④パワー（権力）は支配だけではなく，創造的な可能性を伴うこと

こうした点を押さえた上で，「人々がエンパワメントしあうには，複雑な（多層的な）理解が必要である」として，「人々にパワーを与えるには，パワーがどのように行使され，それが人々にどのように影響するか，また，人々がどのように自らのパワーを行使して，創造するか」，「自身の視点と他のプレイヤーの視点を含む複雑な（多層的な）理解が必要となる」こと，これには，「自分自身がどのようにディスパワーを生み出すことに関与しているかについての理解も含まれる」こと，そして，こうしたことは，「自分自身をディスパワーし，またエンパワーしたりすることに，自分自身がどのように関与しているかを理解することにもつながる」（p.136）とまとめている．

2．パワー（権力）の脱構築と再構築：エンパワメント・ソーシャルワークのプロセス

この部分が Fook のエンパワメント・ソーシャルワーク理論を考察する上での主要な内容である．Fook 自身は，このプロセスについて，以下のように要約している．

エンパワメントにおける脱構築的／再構築的プロセスの 4 段階
①脱構築（パワー（権力）と権力関係の構築と操作）
②抵抗（権力と力関係の支配的な構造に対する問いかけ）
③挑戦（権力と力関係に対する支配的で欠落した構造のラベリング）
④再構築（権力と権力関係に対する現存する解釈の変更と，権力と関連する実践に対する新しい見方の創造 - そしてラベリング）
このプロセスは，次のようなパワー（権力）の 4 つの主要な側面に焦点を当てた分析と実践を含んでいること
①この文脈と風土の中で権力はどのように構築されているのか，また，文脈のいくつかの側面が変われば，権力はどのように変化するのか？
②権力はどのようなレベルで作用しているのか，また，それらがどのように互いに支え合い，あるいは矛盾しているのか？
③状況の中で，さまざまなプレイヤーがどのようにパワーを行使し，経験しているのか？
④関係するパワーの支配力と創造力の可能性は何か？ （pp.136-137）

このように要約した上で，脱構築的／再構築的プロセスの 4 段階について，詳しく述べている．

①パワー（権力）の脱構築とパワー（権力）関係

Fookは，この段階では，「パワー（権力）の主要な種類と源泉を特定すること，そしてそれらが状況の様々なプレイヤーによってどのように理解され，使用されているか（おそらく異なっている）に焦点が当てられる」(p.137）と書いている．そして，ソーシャワーク実践の物語りの脱構築（解体・分解）に役立つ多様な質問を綴ってる．これらの質問は，「重複して，異なる種類の方法で類似の問題について尋ねている」（同）としているが，プレイヤーの中で種類の多い質問が，「異なる概念のパワーの数を最大化する」（同）と指摘する．繊細な差異に敏感な問いの重要性の確認である．また，理解を深める上で「プレイヤー」という概念は重要である．「ソーシャルワークの実践をしているある状況や場面で役割を演じている者，時に演じさせられている者」という理解として受けとめたい．

1．状況の説明から，どのような主要テーマやパターンが浮かび上がってくるか？　どのような用語，フレーズ，またはコミュニケーションのパターンが頻繁に繰り返されているか？　どのようなレッテルやカテゴリー分けが行われているか？　二律背反の証拠があるか？　これらのテーマ，パターン，分類のうち，どれがパワー（権力）に関する考えや仮定を含んでいるか？　表向きはパワー（権力）に関するものでない場合，それらはパワー（権力）の問題にどのように関係しているか？
2．状況に関与している，あるいは影響を受ける可能性のあるすべてのプレイヤー（個人，グループ，組織）は誰か？　各プレイヤーの力の相対的な位置づけはどのようなものか？　また，そのパワー（権力）の源泉は何か？
3．パワー（権力）の源泉は，この特定の状況の文脈に関連しているか？　異なる文脈では，このパワー（権力）は変化するのだろうか？
4．各プレイヤーはどのようにパワー（権力）を行使しているか？　各プレイヤーはパワー（権力）の行使をどのように経験しているか？
5．誰の視点が反映され，誰の視点が欠落しているか？　他にどのようなギャップやバイアスがあるか？　それらは権力関係について何を示唆しているか？
6．どのような解釈や説明がなされ，それは誰のものだったのか？　それらはどのように表現され，どのように状況に影響を与えたか？　それらはどのようなタイプのパワー（権力）を意味していたのか？
7．状況はどのように異なって解釈されただろうか？　また状況の異なるプレイヤーによってどのように解釈されただろうか？　なぜそのように解釈されなかったと思うか？
8．状況の形成や支援に，異なるプレイヤーはどのように関与しているか？　異なるプレイヤーは，どのプレイヤーに力を与え，ディスパワーを与えるような方法で参加するのか？
9．説明の中で，どのような知識や前提が暗示され，使用されているか？　それらは，例えば，実践理論，価値観や信念の体系，パラダイム，人間の行動，道徳や倫理規範，社会規範な

どとどのような関係があるのだろうか？　人間の行動，道徳・倫理規範，社会・政治体制とその変化，ジェンダー・文化的考察など．それらは目の前の状況に関連し，適切であるか？そのような知識や理論は，どのような種類の力関係を維持するのか？

10. これらの前提の源は何ですか？これらの仮定はどのような役割や立場を支持するか？　また，どのような社会的•権力的機能を果たすのか？　また，そのような前提を持つことは，どのような社会的，権力的機能を果たすのか？
11. これらの仮定は，どのような慣行，文化，システム，構造によって支えられているのか？また，これらの前提によって，どのような力関係が維持され，あるいは創造されているのか？
12. 分析から生まれた「権力の理論」とは何か？　どのようなものが支配的か？　私自身の権力についての考え方は，これらの支配的な構成と類似しているか，あるいは異なっているか？
13. 私はこの状況下でどのような力を行使しているか？　状況はどのように異なって解釈されただろうか，また状況の異なるプレイヤーによってどのように解釈されただろうか？　なぜそのように解釈されなかったと思うのか？　そしてそれはパワー（権力）関係とどのような関係があるのか？　(pp.137-138)

「プレイヤー」という概念の使用は，「ゲーム理論」の影響もある．パワー（権力）とゲーム理論については，杉田敦（1991）が参考になる．

②抵抗

Fook は，この段階では，「状況をよりパワーをつけて変えるために，この状況を変える必要がある，あるいは抵抗する必要のあるパワー（権力）のタイプや運動のテクニックを特定することに主眼が置かれる」(p.138）と指摘している．以下，問いの項目である．

1．どのような権力の構造に疑問を持ち，さらに精査する必要があるのか，そしてその理由は？
2．どのようなパワーの構造が，誰のために，ディスパワー的な方法で働くのか？これらはどのような形で互いに支え合い，あるいは矛盾しているのか？
3．私たちは，自分自身や他者にとってディスパワーとなる実践，文化，風土に，どのような形で抵抗することができるのか，あるいは参加しないことができるのか？
4．状況や文脈のどのような側面を変えれば，力関係に変化をもたらすことができるのか？
5．どのような種類の力，そしてその行使の仕方が，どのようなプレイヤーにとって支配的，創造的な可能性を持っているか？
6．状況の変化により，さまざまなプレイヤーが全員利益を得ることができるのか？　あるいは一部のプレイヤーが他のプレイヤーより相対的に利益を得たり失ったりしなければならないのか？　それとも，ある者は他の者に比べて相対的に損をしなければならないのか？

すべてのプレイヤーが相対的に強化されるように状況を変えることは可能か？　(p.138)

③挑戦

Fookは，この段階では，「パワー（権力）の概念のあり方，ひいては状況やその中での権力（パワー）関係の構築の仕方について，具体的な変化を求めている」(p.138) と指摘している．以下，問いの項目である．

1．どのようにしたら，よりパワーを与えるような方法で，これらのパワーの概念にラベルを貼ったり，ラベルを付け直したりすることができるのか？
2．私たちは，誰のために，どのような新しいタイプの思考を支援し，創造することができるのか？
3．私たちはどのようにして，パワーの支配的な側面とは対照的に，創造的な側面を支援することができるのか？
4．パワーの変化をもたらす可能性のある状況や文脈のさまざまな側面をどのように変えることができるか？
5．どのような新しいタイプの風土，文化，システム，構造，状況が，よりパワーを与えるものとして，どのようなプレイヤーによって経験されうるか？　(p.139)

④再構築

Fookは，この段階では，「これまでの分析で示された一連の変化を実現することに主眼が置かれる．これには，自分を含むすべての関係者にパワーを与えるものとして経験される，力関係や構造の変化したシステムを交渉することが含まれる．これは，自分自身を含むすべての関係者にパワーを与えるものとして経験される，力関係と構造の変化について交渉することを含む．これは継続的なプロセスであり，絶え間ない分析によって，よりエンパワメントされたはずの新しい実践でさえ，ディスパワーの可能性を精査する方法が示されることになる．異なるプレイヤー間の交渉のプロセスが含まれるため，互いに関連した一連の変化が起こる可能性もある」(p.139) と解説している．以下，問いの項目である．

1．状況の中でパワー関係の変化をもたらすために，どのような変化が交渉される必要があるのか？　これらの交渉にはどのようなプレイヤーが関与し，彼らの立場やパワーの見方はどのように変化する必要があるのか？
2．これらの変化をもたらすために，どのような異なる戦略を用いることができるのか？　これらの戦略は，私たちが開発したパワーに関する理論の変化にどのように適合するか？
3．エンパワメントのプロセスには，どのようにしてさまざまなプレイヤーを含めることができるのか？　どのようにしたら，パワフルな経験を特定し，評価することができるのか？

エンパワメントの風土はどのようにして創られるのか？

4．この変化のプロセスで起こっていることは，変化したパワーの理論や概念とどのように比較されるのか？エンパワメントに関するさまざまなプレイヤーの実際の経験はどのようなものか？

5．この変化した状況から，さらにどのような疑問が生じるのか？　これらは，私が変更したパワーの概念化とどのように関係しているのか？

6．この比較の結果，私は自分自身のパワー理論にどのようなラベルや分類（あるいは再ラベル化，再分類）をするのだろうか？　私が実践している理論に対する私のバージョン，あるいは用語とは何か？

7．現在進行中の分析の結果，再構築されたパワー（あるいはパワーに関する仮定）の理論とは何か？

8．この状況から学んだことを他の文脈でも使えるようにするために，私はどのように自分自身の権力に関する実践理論を組み立てればよいだろうか？　(p.139)

ここでの「私」というのは，ソーシャルワーカーとしての実践者である「あなた」へのつまりは「私」への問いかけでもある．

Fook は，「脱構築－抵抗－挑戦－再構築」というこのエンパワメント・ソーシャルワークの実践のモデルについて，「私たちが実践する様々な状況を分析し，変化させるための枠組みとして使用することができる」(p.140) とし，その理由として，「すべての状況は，個人内外のミクロな交流から，国家や国際的な文脈に至るまで，さまざまな実践の層を含んでいるから」(同) と書いていた．そして，「私たちの焦点は，焦点を当てたい分野によって，細かかったり，広かったりする」(同) ので，「私たちが焦点を当てたいと思う分野，そして私たちが潜在的に影響力を持つと思う分野によって，私たちの焦点は微細であったり，広範であったりする」(同) と結んでいる．

ここまで読んできて大切な視点は，エンパワメント・ソーシャルワーク実践における「問い」の重要性ということである．「問い」を立てるちから，「問い」を共有するちから，「問い」にふさわしい答えを対話と学びを通して共働して出していくちからなど，「問い」の重要性に気づくことができよう．そして，「脱構築－抵抗－挑戦－再構築」のプロセスは，一方方向のものではなく，諸課題により，絶えず「行きつ戻りつ」している．その「問い」は，その都度，リフレクションを伴う批判的であり対話的な学びを通して，主流な物語りを抵抗的に解体しつつ，新しい物語りを挑戦的に創り上げる営みでもある．

3．エンパワメント・ソーシャルワーク実践における諸課題

Fook は，「第三部　実践の再考　8　エンパワメント」の後半部分については，前半のプロセス論を受けて，具体的にソーシャルワーク実践を行う際の諸課題として，次の 8 つの項目を立て

て論じている．Fookがソーシャルワーカーたちとさまざまなワークショップでの「リフレクション（ふりかえり）」の実践をする中で浮かび上がってきた諸課題である．こうした実践を通して，切実なジレンマであったのが，この「パワー（権力）」の問題であった．以下，順に概要を述べ，わたしのコメントを加えておく．ここの部分は，要約されたかたちで記述されていて，どのような実践をどう分析してきたのかが本文だけでは理解しにくかった．もとのFookの論文にもできる限り当たり理解をしようと努めたが，文化のちがいもあり，いささか難渋した．

①ソーシャルワーク実践における「パワー（権力）」の共通構造

この項目でFookが取り上げているのは，ソーシャルワーカーたちが抱く「パワー（権力），特に自分自身のパワー（権力）に対する両義的（アンビバレント）な感情」である．「自分自身を比較的ディスパワーされた存在として構築している」ことが多いと指摘する．Fookが行ったソーシャルワーカーたちとのリフレクティブなワークショップを通して，「パワー（権力）は，管理者や監督者，抵抗的な同僚，時には消費者の声を代弁する集まりの声」にあり，「自分たち「労働者」にはパワー（権力）があるという声は少なかった」としている．

「私たちが共有したストーリーに共通するテーマは，私たちはそれぞれ自分自身を無力な存在として構築し，私たちが持つかもしれないさまざまなタイプの力の影響を否定したり，最小限に抑えたりしていた，ということである．時には，私たちが行動している個々のクライアントに対して無力であると認識することもあったが，他の事例では，私たちが本来持ち得ていないと思っていた力をその人たちに与えていた．従って，ワーカーが持っていない力を他の人々が持っているということが大きな前提となっていた．ワーカーが自分自身を犠牲者とみなすような感覚がほとんどあった」(p.141)．

ニッポンの特に生活保護や児童相談所などの公務員の立場のソーシャルワーカーは，時に，多くは，良心的な葛藤を抱えるワーカーではない限り，自分の持っている「パワー（権力）」の二面性について，自覚をすることは少ないように思われる．むしろ「立ち位置」を自覚することを避ける傾向にあるようだ．理念や法に忠実でもなく，「パワー」を乱用する事例も多々見られる．良心的なワーカーほど理念と現実との乖離により無力感に襲われることも多い．委託を受けた社会福祉法人のワーカー，少し特殊な置かれ方をしている社会福祉協議会のワーカーも含め，個別具体的な質的な研究が必要であろう．

Fookは，ソーシャルワーカーのディスパワーの感覚（無力感）は，次の5つの側面と関係していると指摘している．

①自己価値の源泉を社会環境に置いている．
②自分自身の特定の特性（例えば，感情）を「非専門的」であると見なしている．
③個人的なアイデンティティと職業的なアイデンティティが分裂している．
④選択肢を制限して見ている（しばしば二項対立や「強制的な」選択として）．
⑤比較的宿命的な参照枠．　(P.141)

そして，共通構造の二つ目として，「敵を構築する」という構造をあげている．それを「自分自身を無力だと思い込むと，逆に他の人々や集団を強力だと思い込んでしまうことがあ」り，Fook自身がアジア系学生を差別する同僚と意見が対立した時のことを次のように表現していた．

「この状況を「戦争」として分析し，そこでは「敵」と「味方」しか存在しえず，必ず反対する同僚を敵とみなし，彼女の考えを変えることができなかったのは私の欠陥のせいだと考えた．だから，自分は無力で，敵は強力であるという構図にすることで，自分自身の責任も免れることができた」（P.142）と．

②パワー（権力）は構造的でなければならない？

この項目でFookが指摘している興味深い視点は，ソーシャルワーカーは，暗黙のうちに「構造的な権力」について話していることが明らかになったということである．

「ある程度の権威のある地位（チームリーダーやスーパーバイザー）に就いている者がいたとしても，変化をもたらす（つまり，直接的に挑戦したり対立を引き起こしたりする）ための正式な地位や権威は持っていないと感じている．場合によっては，自分が持っていないと感じている力は，職場に組み込まれた文化に抵抗したり，それに挑戦したりするための文化的・個人的な力であることも．いずれにせよ，私たちは皆，程度の差こそあれ，さまざまなタイプのパワーをもっているにもかかわらず，自分自身を無力な存在として構築していることがわかった．このことは，職場において個人的・文化的なレベルで表現される構造的でないタイプのパワーは，あまり重要でないと考えられていることを示唆しているように思われる」（pp.142-143）．

自分自身を組織の一員として，構造的にも無力な存在として位置づける傾向があるという指摘は興味深い．組織構造の中で「権限」があるにも関わらず，この「権限」をクライエントのエンパワメントと解放のために使えない状況．加えて，構造的にではなく属性にもちえているマジョリティがもっているやマイノリティが獲得したパワーについては，重要視していないという指摘も興味深い．そこには，自身がもつ法律制度に基づく「専門性」と「立ち位置」についての気づきに欠けてしまう何らかの要因があるのだろう．

③唯一の変化は全体的な変化

次にFookが取り上げた課題は，「価値のある唯一の変化は全体的な変化であるという考え方」（同）にソーシャルワーカーが囚われ，この囚われが無力感を助長しているのではないかという指摘である．ソーシャルワーカーたちは，「組織的，構造的な変化のみを価値あるものとしてみてしまう」傾向があり，この傾向を「十分」に自覚することなく，「無限の境界線」に向かって，「規模や程度に関係なく」，おいそれと達することない「問題解決」に向けて奔走しがちであることを指摘する．そして，こうした達成することがない行動に「快適さ」を覚えると同時に「変えられないことへの弁明と自己の無力さを証明し」（同）ていると書いている．

④私たち自身の無力化に加担する

続けて，利用者の無力化（ディスパワー）の状態の維持のみならず，ソーシャルワーカー自身もこの無力化に加担している思考傾向として，単純に「敵 vs 味方」の二項対立の思考を構築し

てしまうことを指摘している．このことを「抑圧との共犯関係」の一例と指摘し，「相対的に不利な立場にあるグループに対して自動的に無力な地位を与えるという「被害者」アイデンティティを構築してしまう」（p.144）としている．

⑤変化と責任

同様に，ソーシャルワーカーが有していると思っている「パワー（権力）」とこうした「パワー（権力）」の行使の結果生じる変化と状況に対する「責任」に関して，「勝ち目のない状況（‘no-win’ situation）（どうにもならない状況）」と感じてしまっているというFookの指摘も興味深い．この矛盾を「責任はあるが無力」「強力でありながら無力」「責任感がありながら責任感がない」と表現している．「現実を一定分析はでき，その中での役割の自覚はあっても，変化のための技術や立場と十分に結びついていない」（同）と書いている．

⑥パワー（権力）に関連するその他の前提

Fookは，これまでの5つの課題に加えつつ，これまでの実践研究の分析の結果を利用しながら，次のような記述を加えている．それは，「パワー（権力）の二股的思考，理論の権力性，権力と変革の可能性，権力と言説」との関連である．「権力の二股的思考」については，立場との関連では，「管理者対現場作業員」，「ソーシャルワーカー対サービス利用者」という形態や，働き方との関連では，「権威主義的スタイル」と「同僚的スタイル」というような排他的な対立構造が構築されるとする．また，「理論と実践」との関連もしばしばこうした対立構造を生みやすい．「変革の可能性」のところでは「システム」の中での「無力感」が語られ，最後の「言説」のところでは例えば，「子ども中心主義」の「言説」に縛られ，自分の労働者性を見失うという指摘もされていた．

⑦私たち自身とサービス利用者を再構築する

Fookは，これまで提示した諸課題について，脱構築した内容を今度は再構築していくために，次のような「リフレクション（ふりかえり）」のための対話的な問いを用意している．

1．私たちやサービス利用者が持っているパワーは何であるのか？　このパワーをどのように使うことにより，状況をどう変革するのか？　こうしたパワーをある文脈から別の文脈に移すことができるのか？
2．どのような種類の新しいアイデンティティやラベルを自分たちのために作ることができるのか？　このことにより，自分たちや一緒に働く人たちを，対立しない言葉で（例えば，「ある状況において責任がある」「対人関係の場において力がある」），あるいはサービス利用者を（例えば，「サービスを使う上で知識がある」）と定義しなおすことができるのか？
3．私たちはどのような変革をもたらすことができ，それをどのようにラベル付けし，評価することができるのか？
4．こうした状況における特定のプレイヤーの責任にはどのような異なったレベルがあり，私たちはどのような側面に責任を持つことができるのか？　（p.145）

「責任」も検討が必要な難解な概念である．

⑧「パワーとエンパワメントに関する自分なりの理論を構築していくこと

Ⅴ　まとめ　「パワー（権力）」関係に敏感であるソーシャルワーカーになるために

Fook は，ソーシャルワーカー養成のためのテキストでもある「第三部　実践の再考　8　エンパワメント」の最後の項目で，「パワーとエンパワメントに関する自分なりの理論を構築していくこと」（p.146）の重要性について書いていた．そして，この章の練習課題として，「あなた自身のエンパワメント理論を一文で記述しなさい」（同）というものがあった．正直，とても一文で記述できるような問いではない．けれども，Fook も重要視しているクリティカルなリフレクションを通して，わたしたちは，「自分はどのようなソーシャルワーカーでありたいか」という大きな問いの中で，この「パワー（権力）」と「エンパワメント」の問題について，一人のソーシャルワーカーとしてソーシャルワーク実践をする時に，常に問い続け，考え続けなければならない重要な問いの一つであることは，間違いないと考えていている．

こうして「研究ノート」として綴り始めると，検討を必要とする問いが次々と出てくる．現代という時代は，「近代（モダン）」から「ポストモダン」を経て，新たな共通の価値を確認して，承認し合う時代に突入している．マルクス主義，実存主義，構造主義，ポスト構造主義という変遷の中で，新たな実践的思考の「枠組み」の構築をソーシャルワークの実践理論も求められている．

Fook の言いたいことを訳しながらこなれたニッポン語として理解しつつ，かつ，ニッポン社会における自分自身のソーシャルワーク実践と実践理論を潜らせながら，内在批判的に理解をするという作業は，思いのほか難解だった．的確な翻訳もむずかしいがそれ以上のむずかしさを感じた．そして，単なる「紹介」ではなく，「評価」を伴うこうした作業も同様のむずかしさがある．ソーシャルワーク実践の理論は，「経験にひらかれた実践知（フロネーシス）」（塚本明子，2008）であると思う．Fook の問いの受けとめもふくめ，わたし自身も実践を積み重ねながら，問いつつ，書き綴ることを続けていきたい．

註

1）https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000150799.pdf　20220825 確認
2）https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000199560.pdf　20220825 確認
3）https://www.uvm.edu/cess/profiles/jan-fook　20220822 確認
4）http://www.ibiblio.org/ml/libri/r/RousseauJJ_ContratSocial_p.pdf　20220822 確認
5）https://ch-gender.jp/wp/?page_id=385　20220822 確認
6）http://madewithangus.com/portfolio/equality-vs-equity/　20220822 確認

文献

欧文

Adams（1996）Empowerment, Participation and Social Work Palgrabe Macmillan
Adams（2008）Empowerment, Participation and Social Work（4th）Palgrabe Macmillan
Agger,B（1998）Critical Social Work Theories. Westview Press
Arent,H（1969）On Violence. A Harbest Book.
Capous-Desyllas & Morgaine（2019）Anti-Oppressive Social Work Practice（2rd.）Cognella.
Collins & Bilge（2020）Intersectionality. Polity
Fook,J（1993）Radical Casework. St Leonards,MSW
Fook,J（2016）Social Work: A Critical Approach to Practice（3rd.）SAGE
Garrett.P（2013）Social Work and Social Theory. Bristol Policy Press
Healy.K（2000）Social Work Practices. SAGE
Maclean & Harrison（2011）Power and Empowerment. Kirwin Maclean Associates.
Minow,M（1985）Learning to live with dilemma of difference. Law and Contemporary Problem 18（2） 157-211
Payne,M（2014）Modern Social Work Theory,4th. Basingsroke Palgrabe Macmillan.
Thompson.N（2007）Power and Empowerment. Russel House Publishing.

日本語

アーレント著山田正行訳（2000）『暴力について』みすず書房
岩崎晋也編著（2011）『リーディングス日本の社会福祉 1 社会福祉とはなにか』日本図書センター
伊藤新一郎（2020）「ソーシャルワーカーにとっての「社会福祉の理論・歴史・政策」の意義―近年の福祉政策と社会福祉士国家資格制度の動向を踏まえて―」『北星学園大学社会福祉学部北星論集』第 57 号，pp.43-61
ガベル著木村洋二訳（1980）『虚偽意識―物象化と分裂病の社会学』人文書院
木原活信（2007）「解放のソーシャルワーク」横田恵子編『解放のソーシャルワーク』世界思想社 pp.41-69.
木全和巳（2000）「日本国の社会福祉実践分野における〝エンパワメント〟概念の」理解と導入と使用に関する批判的検討」『社会福祉士』No.7. pp.152-158.
クロスリー著／西原和久訳（2008）『社会学のキーコンセプト』新泉社
白井聡（2022）『長期腐敗体制』（角川新書）
杉田敦（1991）「権力と暴力」『法政理論』第 23 号 pp.148-170.
隅広静子（2010）「クリティカル・ソーシャルワークにおける「クリティカル」概念の整理の試み―ソーシャルワーク教育に必要なクリティカル・シンキングの概念確立のために―」『福井県立大学論集』第 34 巻 PP.43-55
田川佳代子（2012）「ソーシャルワーク再考――クリティカル理論，ポストモダニズム，ポスト構造主義」愛知県立大学『社会福祉研究』第 14 号 pp.1-10
田川佳代子（2013）クリティカル・ソーシャルワーク実践の理論素描」愛知県立大学『社会福祉研究』第 15 号 pp. 13-20
塚本明子（2008）『動く知フロネーシス』ゆるみ出版
バトラー著竹村和子訳（2004）『触発する言葉』岩波書店
ブルデュー（著）今村仁司他訳（2018）『実践感覚 1　2』みすず書房
フレイレ（著）三砂ちづる（訳）（2018）『被抑圧者の教育学』亜紀書房
ブロナー著／小田透訳（2018）『フランクフルト学派と批判理論』白水社
舟木紳介（2007）「オーストラリアのソーシャルワーク専門教育」横田恵子編『解放のソーシャルワーク』

世界思想社 pp.71-102.
中村和彦（2017）「ソーシャルワーク実践理論再構成への素描――「構造‐批判モデル」の導入と養成教育における具体的展開を構想して」『北星学園大学社会福祉学部北星論集』第 54 号　pp.33-47
マクリーンとハンソン著木全和巳訳（2016）『パワーとエンパワメント』クリエイツかもがわ
ルソー著中山元訳（2008）『社会契約論／ジュネーヴ草稿』光文社古典新訳文庫